真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

光秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

【Ｎコード】
Ｎ８４７９Ｚ

【作者名】
光秀

【あらすじ】
平成の世から恋姫の世界へと降り立った一人の自衛官。この者が織り成す新たな外史の物語。※この度ご感想にてご指摘を受けましたので一話と二話を修正いたしました。かなり大幅な修正となりましたので二話につきましては話自体にも変更が生じてしまっています。申し訳ありません。ｍ（＿＿）ｍ　なおこの修正が完了したのは１２／２９の１４：２７です。

タイムスリップ（前書き）

これからこの作品を連載させていただく『光秀』です。

確認はしておりますが多少の誤字・脱字等があるかもしれません。
それも含め批判、感想、アドバイス等ありましたら言ってやってください。

目指すは完結！

これからこの作品を読んでいただく皆様と長く付き合っていけることを願います。

タイムスリップ

俺は荒野の真ん中に一人立っていた。

周りは明るく少し暖かい。

東から吹く風が俺の長い髪をひらひらとたなびかせる。

「此処何処だよ？」

思わずそんな声がこぼれる。しかしそんな呟きも虚しく地面へと沈んでいった。

（まさかこんな所にいるとはな……。たしか俺はさっきまで教官に射撃の訓練を受けていたはずだったんだが）

此処はどう見ても俺の生まれ育った日本ではなかった。なぜなら俺の目の前にはどこまでも続きそうな地平線が広がっているからだ。

辺りをキョロキョロと見回している俺は今の状況にかなり困惑していた。

（とりあえず歩くかな。人に会えればどうにかなるだろ）

そして俺は歩き出した。

―――――――――――――――――――――

「なんだあれは？」

俺の百メートルぐらい先に人のかたまりが見えた。おそらく四人くらいではないだろうか。

目を細めて見たところどうやら一人の女性が三人の男に囲まれている。その様子はあきらかに善良な行為には見えなかった。

俺は別に薄情な人間というわけではない。なのでこんな光景を目の当たりにするとほっておけなかった。

俺は大きく地面を蹴り、直ぐにその集団へと走り出した。

その三人組は腕に黄色い直垂を巻いていた。

「おい！お前ら」

「あぁ！？」

長身の男は低い声でそう言った。男は少し俺を見た後さっきまで女性にちらつかせていた刃物を懐にしまう。そして両脇にいた二人の男に目配せをした。

すると三人男はゆっくりとした動きで俺を囲みだした。

俺の目の前には長身。右には大柄な男。左にはえらく小さい男が立っていた。その三人組はそれぞれ刃渡り十五センチくらいの刃物を俺にちらつかせている。

「手前ぇ有り金と今着てるものを此処に置いてさっさと消えな」

長身の男は俺の首筋に再び懐から出した刃物をぴたぴたと当てながらそう言った。その顔はかなりにやついている。

言いぶりから察するにどうやら標的が女性から俺に移り変わったらしい。

（やれやれ。仕方無いか。まぁ止むをえんだろう）

――――！！

「ぐぁぁぁぁぁ」

長身の男は自らの左の頬を両手でおさえ悶え苦しんでいた。しかし痛みに耐えかねたのかそのまま地面に膝をつき意識を失う。

「……よくも兄貴を殴りやがったな手前！死にてぇのか！？」

俺の左に控えている小さい男は俺の顔に刃物を向けながらそう言った。

その口調からして精一杯強がっているのだろう。だがその刃物を持っている手や声は震えていた。意識してはいないだろうがそれはあきらかに兄貴を殴って失神させた俺を恐れている証だった。

それはこの男の様子からたやすく読み取れた。

俺は正直あまり人を傷つけたくない。
この状況でそんな事を思うのは偽善なのかもしれないがかつて専守防衛の理念を掲げる自衛隊につとめてきたひとりの自衛官として俺はそう思う。

（ならば……）

「十数える間にこの場を立ち去れ。……いち！」
俺のその掛け声とともに二人の男は兄貴と呼ばれていた男を抱え一目散に逃げていった。さっきまで強がっていた男も実は俺には勝てないと悟っていたのだろう。

そして俺はずっと背を向けていた女性へと振り返り声を掛ける。
「大丈夫だったか？」
「はい。助けていただき有難うございます」
彼女は立ち上がりとても落ち着いた口調でそう言った。
その女性は俺より身長が少し低く、スラッとした印象を覚える。髪

や眉が白くそれに合わせたのか自らの格好も白い装束を身に纏っていた。
それにとても整った顔立ちをしている。
「いえいえ。礼には及びませんよ。あっ、でも一つだけ聞いてもいいか？」
俺にはどうしても聞いておかなければならない事があった。それによって今後の行動を決めなければいけないからだ。
「はい。私が分かることでしたら何でもお聞きください」

「じゃあ……此処は何処だ？」
俺にとってはこれは現在の最重要事項だった。
だが質問された当の彼女にとってはとても不可解な質問でしかなかった。
しばらく不思議そうに俺を眺めていた彼女であったが少しすると答えは返ってきた。
「此処は荊州南郡にあります枝江県です」
俺はその返答に少し眉をしかめる。
「少し待ってもらっていいか？」

「はい……」

彼女はなぜか申し訳なさそうにそう一言だけ言った。

俺は顎に手をあて少し考えを纏める。

（荊州だと？ということは此処は中国か？なぜさっきまで日本にいた俺が中国なんかに……。いや、しかしこの人が適当なことを言っているという事も。……いやないな）

さっきの男たちやこの辺り一面に広がる荒野を目の前にしてきた俺はその言葉が事実としか思えなかった。

そんな俺に一つの仮説がたつ。

―タイムスリップ―

そう考えるしかこの状況に説明がつかない。

しかし俺には特に変わった事は無かった。

この不思議な状況に陥る前の記憶は鮮明に残っているがこれといってタイムスリップに繋がると思えるような出来事は一つも無かったのだ。

そもそもこれは本当にタイムスリップなのだろうか？

「どうかなさいましたか？」

真剣な顔で真剣に悩んでいる俺を見かねたのか彼女は俺の顔を覗き込むようにしてそう一言声を掛けてくれた。

「いやなんでもない。教えてくれてありがとう」

そう言うと俺は踵を返し彼女の前から立ち去ろうとした。

「待ってください」

俺は反射的に後ろを振り返る。そこには真っ直ぐに俺を見ている女性の姿があった。

「何処か行く当てがおありですか？」

「いえ、特には」

俺はそう返事をする。

「よろしければいいんですが、私の屋敷に泊りになりませんか？」

彼女は淡々とした口調でそう言った。この申し出は俺にとっては願ったり叶ったりである。が、俺はそれを断った。

「本当に気にしていただかないで結構ですから」

俺は軽く微笑みそう言う。だが彼女は納得していない様子だった。

「それでは私の気持ちが済まないんです！」

彼女は強い口調でそう言った。どうやらいやがおうでも俺にお礼をしたいらしい。きっと義理堅い性格なのだろう。

その彼女の剣幕と粘りに負けた俺は頷いた。

「それじゃあご厚意に甘えさせてもらうよ」

俺は頭を下げお礼を言う。

「！頭を上げてください。本来ならこちらが頭を下げなければならないのですから」

そう言うと彼女は慌てて頭を下げた。そして頭を上げた彼女は自らの名を名乗った。それはこれから少しの間かもしれないが共に時間を過ごす者として当然の礼儀だろう。

だが俺は既にその名に聞き覚えがあった。

「私は『馬良』と申します。真名は『魅音』（みおん）です。助けてくださった貴方にこの名を預けます」

「！！」

（もしかして……）

「馬良……もしや字を『季常』というんじゃ？」

俺はおそろおそる馬良と名乗る彼女に尋ねた。もし俺の考えが正しければ彼女はこの質問にイエスと答える筈だ。

そしてそれが意味するのは……

「はい。しかしなぜ私の字を？」

―馬良と名乗る女性―

―見渡す限りの荒野―

―荊州南郡枝江県―

―黄巾を纏った男たち―

―タイムスリップ―

多少の違いはあれどこのワードから導き出される答えは一つしかない。

「三国志……」

「えっ？」

（此処は三国志の時代なんだ）

俺は表情にこそ出さなかったが確信を持ったその考えに驚いている。

黄巾の男。これが黄巾党の奴らなら今は後漢末期ということになる。

俺はもう一度馬良の姿を見た。

目の前にいる女性、性別は違うが馬良と名乗っている。それに彼女が馬良ならば彼女の眉が白いのにも合点がいった。

「はぁ～」

頭をくしゃくしゃ掻きながら俺は溜息をついた。

膨大な情報量に今にも頭がパンクしそうだった。

なぜ馬良が襄陽郡ではなく此処にいるのか、なぜ女あのか、などの疑問はまた今度考えることにした。

今考えても思考が追いつかない。

俺は一つ大きな深呼吸をして馬良に言った。

「すまない。色々と考える事があったもので。俺の名は『姜維』字は『伯約』だ。これからよろしくな」

俺はひとまずそう名乗った。ここが三国志の時代ならば俺の本名は不自然だと思ったからだ。

「あと教えてほしいのだが真名っていうのはなんなんだ？」

俺はこの真名というのに聞き覚えがない。

「不思議な事を言うのですね。真名っていうのは心を許した者にしか教えてはならない神聖な名。人によって価値観は違うと思いますが私はそのように認識しております」

馬良はさも「当然ですよ」と言わんばかりの口調でそう言った。この真名というのはこの時代？ではどうやら常識、というよりは誰にでもあたりまえに有る。そういったものらしい。

馬良、いや『魅音』が俺に真名を預けたということはさっきの言葉通り俺に心を許したという事なのだろう。

「そうか。じゃあ俺も真名を預けるよ『政義』（まさよし）っていうんだ」

魅音は俺が真名を教えると少し驚いていた。

俺にとっての真名にあたるのは親から貰ったこの『政義』という名だ。魅音の話によると普通真名はあまりむやみやたらと教えないらしい、がその習慣が無い俺にとってはむしろこの名で呼んで欲しかった。

「真名を預けていただけるとは嬉しいです。これからよろしくお願いしますね」

「あぁ」

俺は微笑み、手を差し出す。すると魅音も微笑みながら俺の手を握り締める。

この時代にタイムスリップ？してどうなるか分からなかったがひとまず、のたれ死ぬことは無さそうだ。

俺は安堵しつつ魅音の屋敷へと歩みを進めた。

タイムスリップ（後書き）

「馬氏の五常白眉もっとも良し」といわれる通り馬良は優秀な馬五人兄弟のなかでも特に秀でていたと言われます。

最初なので次も近々更新したいと思っています。

天の御使いとして《前編》（前書き）

連日の更新となります。

今回もうまく書けているか不安です。

天の御使いとして《前編》

俺と魅音は肩を並べ帰路についていた。

帰る当てなどない俺は厚意により魅音の屋敷に泊まらせてもらう事となっている。

日も傾き始め、辺りもだんだん薄暗くなり始めていた。

「政義はなんでそんな格好をしていらっしゃるのですか？」

魅音は俺の格好を今まで気にしていたのか不意にそう言った。

「！？えぇとだな……」

俺は返答に困る。

だが魅音がそう言うのも無理は無い。俺は現在タイムスリップ直前に着用していた迷彩服を着ている。それはこの時代の者から見ればかなり異様であろう。

「えぇと……」

そんな感じで俺は明確な答えを出せないままでいた。しかしこの状況で俺の格好をこと細かく説明したところで魅音は理解してくれない。そんな事は分かっていた。だからあえて俺は説明しない。

しばらくの沈黙が続くと俺が言いづらそうにしているのを察したのか魅音は話題を変える。

「じゃあ何処から来たんですか？」

「……」

俺はこの質問にも正直答えにくかった。だがこのままでは先程のようにまた沈黙が続いてしまう。そんな事を懸念した俺は口を開く。

「日本だ」

当然ながらこの時代の魅音にとって日本は聞き覚えの無い国だ。しかし魅音は額に手を当て自らの知識の中から必死に『日本』という言葉を探す。

だが結局その言葉は見つからない。

「申し訳ないですけど聞いたこと無いですね。何処にあるんでしょうか？」

額に当てていた手を下ろした魅音は俺へと向き直りそう言った。

「えぇとだな。――今は無いんだ」

俺はついそんな事を口走ってしまった。この発言は魅音にとって、いやこの時代の者からしたらかなり奇怪であっただろう。それどころか頭のおかしい奴だと思われかねない。

案の定俺を見る魅音の目は哀れむような目へと変わっていた。

（くっ、そんな哀れむような目をされては……）

この悪循環を脱する妙案が浮かばない俺はついにヤケになりこんな事を言ってしまった。

「俺はこの世界の人間じゃないんだ」

場が一瞬凍りついた。

俺は自らの発言がどれだけ狂っていたか今になってきずいた。しかし今更弁明しても手遅れだろう。

そんな状況に俺は直ぐにでも逃げ出したくなった。

「……そうですか」

だがそんな俺の思いをよそに魅音は意外にも驚いたりしている様子は無くあっさりそう言った。さっきまでしていた俺を哀れむような目もすっかりもとの凛とした目へと戻っている。

その出で立ちは会った時のままであった。

しばらく無言のまま歩き続けた俺たちであったが魅音は俺の腰についている物に目をやると言った。

「その腰についてる黒光りしている物はなんですか？」

魅音が指さした物は俺の腰についているホルスターに入った拳銃だった。

「あぁこれか？」

俺はホルスターから拳銃を抜きとり両手で拳銃を支え持つ。そして正面に銃口を向け撃つ構えをとった。

「これは拳銃といって俺が仕事柄持っていたものだ」

魅音は歩みを止める。俺もそれにつられて歩みを止めた。

魅音はさも不思議そうに拳銃を見つめていた。
好奇心はこの拳銃に興味を抱いていたが警戒心がそんな魅音の気持ちを押さえ込む。

「何に使うんですか？」
魅音は一歩後退り俺から距離をとる。拳銃は未知のもの故その行動は当然だろう。俺はそう思った。
「これは武器だ。使い道といわれると困るが、まぁ人を傷つける物だ」
俺自身、直接拳銃を人に撃ったことは無い。だが仮に日本が戦争状態に突入していたならばこれはそう使われていた筈だ。
俺はいったん拳銃をホルスターにしまい、魅音の言葉を待つ。

「使ってみてください」
「えっ？」
「あなたが私たちの世界の人間で無いというならその証拠を見せてください」

「……あぁ」

俺は再びホルスターから拳銃を引き抜く。

この拳銃は自動式拳銃と呼ばれる物で装弾数は８発だ。

俺は少し悩んだ。仮にこれからこの時代に住むこととなればいくつもの危険が俺にはやってくるだろう。

その状況に陥った時これは必ず必要となってくる物だ。だからなるべく一発も無駄撃ちをしたくない。そう思った。

――しかし

（この一発は今後の俺に大きな意味を持たせるかもしれない）

同時に俺はそうも思った。

俺は再び銃口を正面に向け撃つ構えをとる。俺が選んだ行動は後者だった。

「魅音、耳塞いどいたほうがいいぞ」

「はい」

魅音は両手で耳を塞ぐ。その目は俺の拳銃だけをただ一点見つめていた。

俺は目の前に広がる荒野へと引き金を引く。

――――――!!

周りに轟いたかと思うとその銃声は一瞬にして消えていった。

魅音は両手で耳を塞いだまま突っ立っている。その顔は今までの魅音の表情とはうって変わり鳩が豆鉄砲でも食らったような顔だった。

「おい魅音大丈夫か？」

俺は魅音の肩を軽く揺すりながら言った。

「驚きました。助けていただいた方にこんな事を言うのは心苦しいのですが貴方はさっきの言動からして信用できないと思っていたんです」

それは絞り出すような声だった。

（まぁいきなり「俺はこの世界の人じゃありません」なんて言う奴がいたら俺でも怪しくて信用は出来ないけどな）

「別に良い」

俺は言い捨てるようにそう言った。

「貴方がこの世界の人間でないというのは信じます。ですが私は貴方を心から信じてはいません。真名を預けたにもかかわらずこんな事を言ってしまうのは矛盾かもしれませんが申し訳ありません。そこでその拳銃？とやらを持たせたまま私の屋敷へお連れするわけにはいかないんです」

「……だよな」

つまりこれは拳銃を私に預けろ。そういうことだ。だがこればかりは正論のため仕方無い。

仮に魅音が俺に銃口を向けるような事があってもたやすく対応する

ことはできる。それにそもそも魅音ではうまく拳銃を扱えないだろう。

そこで俺はその言葉のとおり魅音に拳銃を渡す。

そしてその拳銃を懐にしまうと魅音は辺りを見回した。

「日も沈んできましたし先を急ぎましょうか？」

「あぁ」

俺はポケットに手を突っ込み軽くあいづちをうつと歩みを進めた。

それに合わせ魅音も歩み始める。

俺たちは妙な距離感を保っていた……。

―――――――――――――――――――――

俺たちは街へと着いた。

魅音の話によるとここは江陵らしい。街は結構な賑わいを見せ、活気づいている。これはここの太守がいかに有能であるかを物語っていた。

（江陵の太守は劉表だったけな？）

そんな事を考えつつ人混みを掻き分け俺は魅音についていった。

「――どうぞ」

屋敷についた俺が案内されたのは屋敷の一室だった。中は結構広く、おそらく十二畳くらいはある。窓際には寝台が置かれその他生活に欠かせないものはいくつか置いてあったが、不要なものは一切置いていない、いたってシンプルな部屋だった。

「しばらくしたらお呼びしますので」

「ありがと」

魅音は軽く微笑み会釈をすると部屋を出ていった。

その後寝台に腰を下ろした俺はしばらく馬良がなぜ女なのか、やタイムスリップの理由などを考えていた。

――しばらく考え込んでいた俺であったがろくな答えは浮かばなかった。

ギィィ

扉の音が聞こえたかと思うと部屋に魅音が入ってきた。

「政義に会わせたい人がいます」

魅音はそう一言だけ告げた。

そう告げられた俺は部屋をあとにし魅音に案内されるがままについていった。

―――――――――――――――――――――

俺が案内されたのは城内にある玉座の間だった。

そこには俺より身長が高く水色の鎧を纏っている女性がいた。前髪はカチューシャのようなものであげてある。ちなみにそのカチューシャも水色だ。

周りには何人もの兵士が武装して立っていた。俺を警戒してのことだろう。

そして俺の傍らには魅音がいた。

最初に口を開いたのはその水色の鎧を身に纏っている女性だった。

「あたしは江陵太守『劉表』だ。そこの者、名を名乗れ」

俺を指さしながら劉表と名乗る女性は言った。その女性の眼は俺を品定めしているように見える。

俺は目の前に太守がいる事より劉表が女性である事に驚いた。

（この時代は何なんだ？もしやタイムスリップしただけでなくパラレルワールドにも来てしまったとでも言うのか？）

そんな考えが俺に浮かんだ。だがそのことについては一度保留しておくことにした。

俺は劉表の眼を見る。

「俺の名は『姜維』字は『伯約』です」

そんな俺の眼を劉表も見ていたが決して俺は目線を外さなかった。

「……へぇ。なかなか良い眼してるじゃねぇか」

劉表は笑いながらそう言った。そして俺の目の前まで歩み寄ってくる。

そしてすぐに俺の横にいた魅音の方を向く。

「こいつか？自分は違う世界から来ましたなんてぬかしたのは？」

「はい。『才燕』（さいえん）さま。この方がそうです」

そして劉表は俺を足の先から頭のてっぺんまで見下ろす。

（利用価値はありそうだな。たしかに妙な格好もしてやがるし。天の御使いに祭り上げるにゃもってこいだな）

劉表は薄い笑みを浮かべていた。その笑みは見方によっては不気味ともとれただろう。

「お前行く当てがねぇんだろ？」

劉表は皮肉がこもった口調でそう言った。俺はその言い草に少し顔をしかめる。

その表情を見て俺の考えを悟ったのか劉表は言った。

「ふっ。別にお前を馬鹿にして言ったんじゃねぇんだ。――お前行く当てねぇんならあたしに仕えな。返事は明日聞いてやる」

劉表は俺の肩をポンっと叩くと俺に背を向け部屋から出て行った。

「どういうことだ？」

俺は今の出来事について魅音に尋ねた。

「実は政義に才燕さま、えっと劉表さまに仕えて欲しいんです。だからさっきその事について進言していいました。お節介でしたでしょうか？」

「いやそんな事は……」

どうやらさっき俺が部屋で待たされていたのは魅音が俺のために就職活動をしてくれていたからしい。

しかしこの魅音の言い方には裏があるように思えてならなかった。

「それでは今日のところは部屋で休んでください」

そう言われた俺は自室へと戻りしばしの睡眠へとついた。

天の御使いとして《前編》（後書き）

変な言い回しや誤字・脱字等ありましたら言ってやってください。

天の御使いとして《後編》（前書き）

※この小説を１２／２９　１４：２７以前に読んでいただいた方は申し訳ありませんが第三話を読んでいただく前に第一話と第二話を読んでからにしてください。
理由といたしましてはご感想をいただいた際にご指摘がありましたので修正したからです。まぁこの程度なら問題ないのですが作者の力不足故に話が大きく変わってしまいました。
本当に申し訳ありません。今後はこのような事が無いようにいたします。
m（＿＿）m

天の御使いとして《後編》

朝起きた俺は直ぐに魅音の案内をうけ玉座の間へと行った。

――――――――――――――――――――――――

「才燕さま、連れてまいりました」

今この場には俺と魅音、そして劉表の三人しかいない。どうやら他の兵士たちは劉表によって人払いされたようだ。

俺は欠伸を堪えいつもの表情を保っている。昨日は色々とあったため正直まだ眠い。

そんな俺に開口一番に告げられたのは昨日の事だった。

「それじゃぁお前の答えを聞かせてもらおう」
劉表は足を組み玉座に座ったまま俺にそう問いかけた。その姿には変な威圧感を覚える。
別にその威圧感に負けたわけではない。が、俺は言った。
「はい。仕えさせてもらいます」
今にも閉じそうなまぶたを精一杯持ち上げ目を見開く。
（まぁ正直この人に仕えないと俺はその辺でのたれ死ぬしかないからな。こればかりはイエスと答えるしかない）
すると劉表は昨日と同じ不適な笑みを浮かべた。その笑みにはまたしても悪寒が走る。
「それはあたしに忠誠を誓うという事でいいんだな？」
俺にそう確認を求めてくる。俺は今、捕らわれた鼠も同然だ。この問いかけにもイエスと答えるしかない。いや、おそらく劉表はそれが分かっていて言っているのであろう。
俺は小さく頷く。
これは俺が劉表と主従関係を結んだ証となった。
そして僅かばかりの沈黙が続く。

そんな中きりだししたのは劉表だった。

「臣下になったお前に一つ条件を言い渡す」

太守としての威厳のある面持ちで劉表は言った。

「なんでしょうか？」

俺はいたって普通にそう切り返す。実際まだ君主と家臣という関係に実感が湧いていなかった。まぁ身分制度など存在しない世の中で育った俺には無理も無い事だ。

そんな俺を尻目に劉表は続ける。

「お前には大切な役割がある。まだお前には言えねぇがそのためにはお前の名は伏せておかなきゃならねぇ。当分は適当に名は隠して適当にやり過ごせ」

劉表はその一字一句をはっきりと言った。俺にはまだその真意は分からない。だがその表情から察するに重要な事なのだろう。

「分かりました」

俺は表情を変えずに言った。俺自身、劉表の言葉に追求するつもりは無い。

劉表は一度視線を足元に落とした。その様子から何か呟いているように見える。

再び俯いた顔を上げた劉表は立ち上がり俺に言った。

「お前に初仕事をやる。訓練場に行ってそこにいる兵たちの調練をしてこい。なおその兵たちはお前の直轄部隊にしてやる」

劉表は口角を少し上げていた。

（……本当によく分からない人だな、劉表っていうのは。全然何考えてるか分からない）

「兵に案内させる。そいつについていきな」

「はい……」

俺はいきなり直轄部隊を与えてもらえるという待遇に驚きつつも兵の案内のもとその訓練場へと向かった。

俺がいなくなったこの場には劉表と魅音を残すのみとなった。

いまだに少しにやついている劉表に魅音は疑問を抱く。

「なぜあの者を天の御使いに祭り上げないのですか？才燕さま」

あまり聞かれたくないのか魅音は自らの袖を口元にあて小声でそう言った。思惑通りその声は劉表にしか届いてない。

そんな魅音の様子につられたのか劉表も小声になり返事をする。

「あぁそうだな、奴を天の御使いに祭り上げるのは簡単だ。だが奴が何処から流れてきた奴か分からないうえに才覚も分からないのではあたしたちにとっちゃ危険でしかねぇ」

未知の存在である男に気安く重要な役割は与えられない。それはこれを意味していた。

「じゃぁ様子見ということですか？」

「あぁ」

しかしその反面、劉表は男に一種の期待を抱いていた。天の御使いとしての役割もそうだが劉表はあの男から異様な雰囲気を感じ取っている。

それはたしかな証拠の無い勘のようなものだったが。

「ではなんでいきなり直轄部隊をお与えになったんですか？それこそ危険なのでは？」

魅音は少し首を傾げ劉表にそう聞いた。

だがそれを劉表は鼻で「ふっ」と笑うとこう言った。

「まぁそれはあたしの気の迷いさ。――それにあの兵たちはただの兵じゃねぇ。もしもの事があれば容易く処理できる」

そして劉表は魅音に背を向ける。その背中はとても大きく見えた。

背中越しに劉表は言う。

「それに魅音を助けた奴なんだろ？お前が連れてきた奴だ。多少は信じてるよ」

その時の劉表の表情は分からない。

魅音は唯一言。

「そうですね」

その言葉を会話の幕引きとし二人はそれぞれの仕事に戻った。

俺は今兵の案内により訓練場の前にいる。
しかしそこは俺の予想していたような場所ではなかった。四方が高さ３ｍくらいの壁で閉ざされていて異様な雰囲気をかもしだしている。隔絶された空間だった。

俺は扉を開け中に入る。

見渡したところ中はかなり広く天井はつきぬけ青い空が見えていた。

そして俺の目の前には人相の悪い男が百人くらいいる。しかし決して並んでいる訳ではなくそれぞれが思い思いにこの空間に存在しているだけだった。

皆兵とは思えぬ出で立ちだった。
ある者はその場に座りこみながらぼーっと空を眺めている。またある者は何が原因かは分からないが派手な喧嘩をおっぱじめている。

「……」

俺は苦い顔で傍らにいた兵に問いかける。

「こいつらはなんなんだ？」

その問いに兵も嫌そうな顔をして答えた。

「この者たちは正規兵ではありません。なんらかの罪を犯した罪人共です」

そしてそれを言い終わった兵は「早くこの場から去りたい」と言わんばかりに扉を開けその場を後にした。

兵が出て行った瞬間この場にいる罪人たちの目は俺へと集まる。それは決してこれから調練をしてもらう者に対する目ではない。その目は獣のように鋭かった。

俺は顔を強張らせながらもとりあえずコンタクトを図る。

「どうも……」

「……

（無視が一番きついんですけどな）

その時、罪人たちの中でも比較的おとなしそうな男が軽く手を挙げた。

「俺たち何も聞かされてないんですけど何するんですか？」

その顔は少なからず不安にかられている様子だった。

その兵の話によるとこの罪人たちは比較的軽い罪ではあるが警備兵により捕まってしまい此処に連れてこられた者たちらしい。

罪人を調練し兵とする。

それだけでも結構異例のように思えるがこれなら劉表が俺に直轄部隊を与えると言ったのにも納得がいった。

罪人はそれなりの状況に陥ったがために罪を犯す。それを更正させるのは中々難しいだろう。そんな人間は少しでも減らしたい。だから俺に兵として更正させる。そんな劉表の思惑が読み取れた。

俺が口に手をあてそんな事を考えていると一人の男が声を荒げて言った。

「どうせ俺たちゃ落ちこぼれだ！今まで散々馬鹿にされて生きてきた、だから手前も俺たちを馬鹿にしてんだろうが！黙ってねぇでなんか言えやこらぁぁ！？」

俺の無言をそう感じ取ったのかその男は俺にズンズンと歩み寄ってきて胸倉を掴みかかってくる。

俺は表情を変えない。

「俺はお前たちを兵として調練するよう頼まれた。――手を放せ」

その俺の言葉に男たちはざわめく。俺の胸倉を掴んでいた男も手を放した。何か感じるものがあったのかもしれない。

男たちは直ぐに静まり俺の次の言葉を待つ。先程まで俺につっかかっていた男も俺を食い入るように見ていた。

口では人生に絶望したみたいな事を言っていても心ではどこかに希望を携えていたのだろう。

（だがまぁたしかに兵として太守に雇ってもらえればこの男たちの生き方も変わってくるのは間違いないとは思うがな）

俺はそんな男たちを十人ずつ十列に並ばせる。男たちはすんなりその指示に従った。

（多少荒い方法だし俺のポリシーに反するが仕方無いか）

そして俺は男たちにこう告げた。

「――――どんな手を使ってもいい。俺をお前たち百人で地面に這い蹲らせろ、それが今日の調練兼兵適正試験だ。……まぁ出来るなら殺してくれてもかまわんがな。――――さぁ始めろ」

俺は拳を前に出しファイティングポーズをとる。

男たちはいきなりのその言葉に少し戸惑っていた。

「早く来い」

俺は短い言葉でそう言った。

すると一人の男が俺めがけて殴りかかってくる。俺はそれを左手で軽くいなし右手で思いっきり男の顔を殴りつけた。
男はそのまま後ろに吹っ飛ぶ。

「さぁどんどん来い！俺を這い蹲らせないと兵にはなれんぞ！」

その言葉をかわきりに次々と男たちは殴りかかってきた。俺は壁に背をあずけ正面だけに集中する。自衛隊でも異色の強さをほこっていた俺は男たちの攻撃をいなしては殴る。またいなしては蹴る。それを繰り返した。

三十分ほどたてばこの場に立っている者はいなかった。

俺を除いて。

地に這い蹲っている男は歯を食いしばり悔しそうな顔をしている。
己の無力さを嘆いているのだろう。
またある男は周りの目も憚らず泣いていた。これから再びやってくる苦悩の生活に恐怖を抱いたのであろうか。
男たちは皆地面をただ見つめている。

俺を見るものなど一人もいない。

俺はそんな男たちを惨めには思わない。ただ生きるだけでなく『生』に意味を見出そうとした男たちを、それが失敗に終わり嘆いている男たちを惨めだとは決して思わない。

「明日また来い」

俺は男たちを見て小さくただはっきりと言った。その時の俺は多分笑っていた。

その声に次々と男たちは顔を上げる。

「お前たちは今日から俺の兵だ。罪人なんて関係ない、一人残らず俺が面倒見てやる。だから絶望するな。……俺の名は姜……」

俺は名を明かそうとした時に劉表との約束を思い出した。

（そういえば劉表に名は明かすなって言われてたな）

「お前たちに俺の真名を預ける。『政義』だ。よろしくな」

俺は右手で敬礼の姿勢をとった。

そんな姿を見た男たちは力無く立ち上がる。自ら立ち上がれない者は他の男の肩を借りて立ち上がった。

そして次から次へと俺と同じ敬礼の姿勢をとり始める。

（なんか……いいなこの感じ）

目の前の光景を見た俺はこの時代に来て初めてたしかな信頼を築いた気がした。

天の御使いとして《後編》（後書き）

劉表は威厳のある風貌で政治に長けていたそうです。
また来る人を拒まなかったため荊州の地には優れた人材が多かったとか。

罪人部隊（前書き）

あけましておめでとうございます。

２０１２になりましたね。私にとっては受験が控えている年です。

準備はしてきたんですが受かるかどうか……。

まぁ私の私情はどうでもいいでしょう。

今回も読んでいただけると嬉しいです。

罪人部隊

昨日の調練から一夜たち俺は再びあの隔絶された空間へと足を運んでいた。

刻は既に昼を過ぎており暖かな日差しがこの空間にも差し込んでいる。

「では調練を始める」

「はっ！！」

俺の目の前には昨日から直轄部隊となっている男たちの姿がある。

規則正しく並び、敬礼の姿勢をとっているその姿は昨日のように粗暴な態度をとっていた罪人とは思えなかった。その士気だけ見れば正規兵にも劣らないかもしれない。

いや、よもやそれ以上……

俺はそんな男たちの変わり様に内心疑問と驚きを覚えつつ話を続ける。

「まずお前たちには考えてもらわなければならない事がある」

その言葉に男たちは腕を下ろし息を呑む。

場には妙な緊張感が漂っていた。俺自身も平静は装っていたが目の前の男百人を従えようとしている自分に心臓が高鳴っている。

そんな鼓動を沈め、俺は言った。

「まずお前たちは集団戦法の利点を考えろ。大数対少数の場合は特にだ」

そして俺は一人の男を指さしその利点を答えるように言う。

男は突然の指名に驚いていた様子だったが俺の問いに率直に答える。

「数が多い……」

「そうだ」

俺は前列に並んでいる男たちの顔を見渡す。

「孫氏の兵法にもある通り戦は数の多い方が有利だ。兵の錬度や士気、その場の環境にも変わってくるだろうが基本的には多いにこした事は無い」

そんな言葉を男たちはまじまじと聞いている。その眼は真剣そのものだ。

「つまり俺が何を言いたいかと言うと……お前たちは昨日俺を殺せている筈なんだ」

その言葉に男たちは再び息を呑む。中には冷や汗をかいている者もいた。

俺もその男たちの表情に感化されいっそう鋭い顔つきへと変わる。

「なのになぜお前たちが昨日俺を殺せなかったか……それは簡単な事だ、連携が全くとれていないからだ。お前たちは百人もいながらその連携が出来ていなかった。だから俺に負けた。……まぁ初対面の奴と連携をとれといっても難しいからな。昨日ばかりは仕方無いだろう」

その言葉に男たちは隣の男の顔を見合う。多分そんな男たちの中には初顔合わせの奴もいたであろう。

そんな男たちの視線を俺は再び俺へと戻す。

「洗練された連携を持つ百人に勝てる奴なんてこの世にはいない。そんな奴は鬼神くらいだ」

俺はもう一度男たちを見渡す。

「俺が目指すこの部隊の姿はそういうものだ」

鋭く固めていた表情を崩し微笑みを浮かべる。

「――――――――――!!」

その言葉に男たちは身震いした。

今まで孤独に罪を犯して生きながらえていた自分が他人と協力して戦場を生き抜く。それは男たちにとって喜びでしかない。苦になるなんてもってのほかだ。

他人とのかかわりに飢えていた彼らだからこそなおさらそう思うのかもしれない。

そんな彼らを見た俺はわずかばかりの喜びを覚えつつ早速調練を開始した。

―――――――――――――――――――――

「よし！しばし小休止をとる！」

男たちはうな垂れその場に座り込む。

（初日にしてはハードすぎたかもしれないな？もう少しペースを落とすか？）

俺はうな垂れていた男を一人捕まえると訓練場の外へと連れ出した。

その男はかなり息遣いを荒くしていた。肩が上下に揺れ、肩で呼吸をしているような状況になっていた。そんな彼の様子を見た俺は連れ出しといてなんだが心配の言葉をを掛ける。

「大丈夫か？」

彼は深呼吸を何度かし、呼吸を整える。

「……はい、大丈夫です」

その言葉に俺は安心の表情を浮かべる。

「何か御用ですか？政義さん？」

「あぁ、もしかしたら調練が少し厳し過ぎるかもと思ってな。――その辺どうだ？」

「そんな事ですか」

彼は軽く笑い服についた砂を払う。そして俺の顔を見て言う。

「体が苦でも私たちの心は苦じゃありませんから」

「どういうことだ？」

俺はその言葉に素直に疑問を抱く。

そんな俺の考えを読み取ったのか彼は俺の問いに答える。

「お分かりにならないんですか？それは皆、政義さんを慕っているからですよ。いや、心酔という言葉の方があてはまるかもしれません」

そしてまたもその言葉に俺は疑問を抱く。

「なぜだ??」

彼は半分呆れたような顔をしていた。そんな顔をされても困るんだがな。

「覚えていますか昨日の言葉?罪を繰り返していた私たちを罪人としてじゃなくその前に一人の人として言ってくれたあの言葉に私たちは誓ったんです。ほとんどが身寄りの無い私たちです。政義さんに一生尽くそうって」

その顔は清清しかった。何も裏が無い澄んだ表情だった。それだけに俺は心を痛める。

「あれは正直に言うともともと劉表から……」

そこから先を俺は言わなかった。いや言えなかった。

彼ははゆっくりと首を左右に振っている。

「たとえ形だけでもいんです。それに私たちはあの言葉を政義さんの真の声だと信じていますから。それでいいんです」

あの時の言葉は本音だった。それは間違いない。だが心苦しかった。

そんな俺を見た彼は敬礼をし言った。

「これからも厳しくお願いいたします！――失礼します！」

そして彼は訓練場へと戻っていった。

（責任はとらないとな……）

尊敬の意を含んだ彼の言葉は俺をそんな気持ちにさせた。もちろんこれから彼らを率いて戦う事もあるだろう。その時俺はこいつらをすこしでも生き延びさせなければならない。

そんな事を思った。

そして俺も訓練場へと戻っていった。

――――――――――――――――

それから二ヵ月後のある日だった。
部隊とはどんどん親睦を深めている俺であったが劉表や馬良との微妙な距離感はあまり埋まっていない。まぁ姜維という名が名乗れない俺では呼びづらいという理由ではあるが劉表とも真名は一応交換したぐらいはあるがな。

そんな劉表へと届いた知らせだった。
その知らせとは豫州で暴れまわっていた黄巾党がこの江陵へと流れ着いてきたというものだ。最近朱儁が豫州を平定したとの報告が入ってきていたのでこれはその残党と思われた。
数にして約四千。決して油断出来るような兵力では無い。
玉座の間でそれを耳にした劉表はすぐさま軍議を開く。
その軍議には僭越ながら俺も呼ばれる事となった。

軍議に参加した俺であったが周りの目がとても冷たい。劉表や馬良はさほどであったがその他の文官や武官がとても俺を毛嫌いしている様子だった。
たいした実力も見せないまま一部隊を任されている俺に疑問の念や嫉妬の念を抱いているのであろう。そうに違い無い。

軍議はどんどんと進んで行く。そして内容は先鋒を誰がつとめるかへと移った。

そんな時一人の文官が言った。

「そういえば罪人どもを指揮している男がおりましたな？力をはかる意味でもその者に先鋒を任せるのが良いと思うぞ？」

その顔はあきらかに俺に対する嫌がらせ。若しくはこの戦で死ねということだろう。その意見に周りの諸官も無言でいる。これは暗黙の了解というやつだ。

俺の兵はわずか百。これでは勝ち目などはなから無い。

———並の部隊ならな。

「何を笑っているのだ！？」

「俺か？？」

俺はきづかないうちに笑っていた。笑うといっても薄く笑みを浮か

べる程度だが。

そして俺は言った。

「その任、承りました」

俺の表情には自信しかあらわれていない。そんな表情にその文官をはじめ諸官は皆驚いている。

だがひとり劉表だけはいつもと変わらない表情をしていた。

（おもしろれぇなこいつ。ふっ、今にも笑いそうだよ）

劉表はこの無謀と思える政義の言葉を不思議と無謀だとは思わなかった。それどころかおもしろいなどと思っている。

俺は劉表に進言した。

「この任につきまして五百程の兵をかしていただきたいのですが」

すっかりこの主従関係に慣れてしまった俺は劉表の前に歩み寄りそう言った。その言葉に劉表は少し考える素振りを見せる。

（最近見ててもの真面目に仕事してやがるしな。まぁ当面は信用出来るか……）

時の経過により少しばかりの信用を得ていた政義は劉表にその進言

を受諾された。

だがさっき政義を先鋒に推薦した文官は劉表に言う。

「こんな奴に五百もの兵を与えるのは危険です！劉表さま、お考え直しくださいませ！」

（こいつ自分で先鋒やれとか言っておきながら……）

俺は珍しく声を荒げその文官を鋭く睨むと言った。

「貴様は劉表さまの臣下である俺に百対四千で負けろと言うのか！？それは劉表軍が黄巾党に負けるも同義！貴様それでも劉表さまに仕える者か！？」

「うっ！」

その俺の言葉に文官は萎縮してしまう。ほかの諸官たちも俺の剣幕に何も反論はしてこない。

場に静けさが戻ると劉表は決断を下す。

「先鋒は政義だ！今すぐ出陣しやがれ！」

「はっ！」

そして俺は直ぐに出陣の準備へとかかった。

罪人部隊（後書き）

本当は戦闘までいきたかったんですが思いのほか話が長くなってしまいました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8479z/

真・恋姫†無双～平成の世から来た者～

2012年1月1日00時49分発行